

前言

科研・研究課題「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究～海川・物流網を視座として～」
〔課題番号 17K02480。研究種目 平成 29 年度 基盤研究(C)。研究期間 平成 29 年度～33 年度〕は、
同じく科研・研究課題「地方談林俳諧文化圏の発展と消長～西鶴の諸国話的方法との関係から～」〔課題
番号 24520252。研究種目 平成 24 年度 基盤研究(C)。研究期間 平成 24 年度～28 年度〕によって得
た、談林俳諧の発展と消長の研究成果に積み重ねることによって、ある種の揣摩憶測でしかなかった仮
説を可能な限り解明することを目的としている。その思惟するところをあげれば、(1) 談林俳諧の担い
手の多くは、元来が地方の裕福な旦那衆であった。(2) 彼らは江戸時代に利権を得た新興商人が多く、
地方に経済基盤と生活基盤の拠点を置き、生産物を大量に集積し、川運や湖運や海運によって、大量消費
地である都市部、三都を往来していた。(3) 17 世紀に成立した江戸幕府の財政基盤は地方に点在する
徳川直轄地の米であり、その米を現金化するために都市部への廻米制度が始まった。大量の米を運搬す
るには海運輸送が効率的であり、寛文年間(1661-73)には河村瑞賢が開発した西廻り航路が北海道から
日本海側東北、北陸、山陰、九州、四国を大坂・京都と結び、東廻り航路が太平洋側東北、太平洋側と江
戸を結び、天領のみならず地方の諸藩と都市部の交易が盛んになった。(4) この「舟」と「海」の時代
の到来時期と談林俳諧が急速に発展した頃〔寛文・延宝年間(1673-81)〕とが重なり合うのである。(5)
もちろん、都市と地方を結んだものは交易だけではなく、文化交流も盛んとなった。(6) その諸相
を描いたのが、井原西鶴(1642-93)の浮世草子であり、西鶴得意の諸国話的方法だったのである。(7)
西鶴は大坂談林の雄であった。西山宗因の談林派はすでに全国に展開しており、三都に限らず、地方にも
存在した。彼らと情報交換し、「話の種」を得ていたのが西鶴とも言えるのである。(8) 気がつけば、
地方談林の人々は上方の西鶴を中心に放射線状に個々つながっており、いわば点と点を結びつける陣容
が整い始めていた。それは例えば西山宗因と大坂談林、西山宗因と京都談林、西山宗因と江戸談林とい
うように談林俳壇形成の特徴と言えよう。(9) そうなると、天和二(1682)年、談林俳諧の長である西山宗
因が没すると籬が外れたようになってしまう。西鶴も浮世草子作家となり、地方談林の人々も俳諧の中
枢を失ってしまった。(10) そこに出現したのが貞門俳壇でも談林俳壇でも聞いたことがない、松尾芭蕉
(1642-93)という俳人によって堅い絆で結ばれた蕉門集団だったのである。(11) はからずも、談林俳壇
として言語遊戯を自らの楽しみとしていた人々にとって、蕉風の芸術理論は一朝一夕で受け入れられる
ものではなかったし、芭蕉を師として仰ぐ学統のような師弟関係には逡巡するものの方が多かったはず
である。(12) そこで、芭蕉自ら、弟子を求める旅に出る。特に地方俳壇のリーダーを蕉門に招くことは、
点ではなく面として蕉風俳諧を普及できる。(13) 元禄十五(1702)年の『奥の細道』刊行がその蕉風普及
の誇示にあるなら、後世から見て、結果は大いに成功したといえよう。(14) それならば、『奥の細道』
刊行以前の「奥の細道」の旅そのものを拠り所にすれば、地方談林俳壇の牙城が鮮明になるのではな
かろうか。(15) それまでの芭蕉の旅は概ね内陸部にあった。それが「奥の細道」の旅では太平洋岸・日本海岸
が多い。陸の芭蕉と海の西鶴。そのテリトリーの闘ぎ合いを追究したい。